

ネパールの風

’98ネパール日記

ヤラ・ピーク登頂 その・12 最終回

後藤 隆徳

右手奥に竈（かまど）が2つ。煮炊きはここで行われる。小さな電熱器みたいな物もあった。水道はなく、大きな瓶に水が汲んである。食器を洗う時は、食器に水を入れてコチョコチョと指先で洗うと窓から下の庭に捨てる。この洗い方では慣れないとちょっと辛いものがある。

薄暗い部屋に何人かいた。左手にラジェンドラさんとお兄さん。正面にお父さんと小学校の先生をしているという妹。右手にお母さんと、お兄さんの奥さん。そしてそれらの子供たちが5～6人いる。あまり大きくない家なのに、どこにこんなに住んでいたのかなぁという感じである。昔の日本の「大家族制度」そのものだった。

女性たちが食事を作ってくれた。こちらは箸を使う習慣がないので手掴みで料理する。床に汁がこぼれた。真黒なタオルで拭き取る。そしてそのタオルで私達に出す皿を拭いたりする。薄暗くてハッキリはしないが、とにかく「超衛生的」である。前述したが結局、高岡はそんな光景を目の当たりにして、すっかり体調を崩してしまった。

ご飯、鶏肉、野菜などの料理が出された。こちらでは鶏肉はまだまだ贅沢品である。ラジェンドラさんが気を使ってくれたのだろう。食事が始まった。ただし、私達3人とラジェンドラさんだけである。こちらは貧しさのためか、1日2食の習慣で、夕食はまだまだ遅く21時頃という。

ニコニコとズラーッと家族が並び注目するなか私達の食事は始まった。何か落ちつかなかったが、ここは覚悟を決め習慣に従い「手掴みで」いただく。

味はけっして口に合うものでなく「ウッ」とくる感じである。高岡、私は全部食べ切れなかった。所が何故かあの好き嫌いが激しい加藤だけは全部平らげたから分からないものである。「イヤァ、私は何でもないよ」というが本当かなぁ。

最後にお茶を頂き雑談をして「ナマステ」でお開きとなった。家族全員の見送りをうけて外に出ると雨はザンザン降りだった。ずっと待っていたタクシーに乗ってカトマンドゥに帰る。途中の道路が氾濫し車ははまりそうになった。

みやげ物、旅行会社などの事業などを行うラジェンドラさんだったが、家はまだまだ貧しそうだった。ハッキリいって初対面の私達を何故わざわざ「余り綺麗でない」家に招待

してくれたのか分からなかった。来日の際、親切にされたとは聞いていたが。ただ、ネパールの平均的な一般家庭生活を垣間見ることが出来たことは貴重な体験だった。長い一日は終わった。今日は柳下君の命日だった。

飛行機からチョモランマを見る

第13日目 5月5日(晴) カトマンドゥ11:00-香港16:00(泊)

いよいよカトマンドゥを離れる日が来た。今泉が元気がなかった。昨夜外出した時ランニングと短パンで冷雨に打たれ風邪をひいたらしい。

ネパールに来てから今泉は4人の中でただ一人ずっと調子が良く、このまま帰国するのではないかと思われていたが、最後に油断したようだ。熱っぽく食欲がない。朝食はほとんど食べれなかった。

ベンツのマイクロバスで空港に向かう。相変わらず埃っぽく喧騒とした街も少しは見慣れてきた。来た時よりだいぶ蒸し暑くなった空港からロイヤル・ネパール航空のジェット機は私に感傷の時間を与えず一気に飛び立った。

上空は一面の雲海で左手にヒマラヤの巨峰群がひしめいていた。中でも群を抜く巨大な三角錐！。それは今、労山全国連盟隊が挑んでいる世界最高峰・チョモランマ(エベレスト)だった。私もかつて挑んでみたいと思った時期もあったが……。

トイレに行った際、ネパール人のスチュワーデスと話をしてみたら、今日は香港に着いて、またカトマンドゥに帰ると言っていた。今泉は相変わらずグツタリしていた。

夕食はホテル近くの「香港料理」店で食べた。調子が最悪の今泉は少し食べて帰った。言葉が分かれば珍しい物も食べようが、ままたまらないがマアママ。料金は結構高かった。夜は街を歩きショッピング。有名ブランド品が並ぶ。店員と打打発止(ちょうちょうはし)の値引き交渉。我々の余りの交渉に日本語が少し話せる店員は変なイントネーションで「それはないよ、それはないよ」と眉をしかめる。とにかく値引き交渉が面白い。店員も楽しんでるが、香港も不況のまっ只中の折り、必死である。

私は一番お世話になっている一緒に住んでいる方にバックをとったが、好みから分からないの理由で、絹のパジャマで誤魔化した？。

ホテルに帰ると今泉はベットに横になっていた。少し元気になったとのことだった。

静かできれいな国、それは日本

第14日目 5月6日(晴) 香港9:00-成田15:00-三島17:00

眼下に日本の島影が見えたときは何とか無事に帰国したかと思った。飛行機のなかで体調をはかる問診表を渡された。下痢は、熱はなど何項目かある。入国する際窓口に提出するが、今泉が正確に記入し過ぎて引っ掛かり30分程待たされた。

東京から三島に向かう。いつもは喧騒を感じる東京だが今日はヤケに静かだ。人々も物腰柔らかく上品だ。そして街がきれいだった。とにかくゴミがない。潤いもある。まあ、30年前の日本から帰ったようなものだから、それも仕方ない。

前回、ヨーロッパ・アルプスから帰ったときは、日本のビールとワインのまずさを感じたが、今回はそれ以前の問題だった。世界にはまだあんな国が多いのだろう。新幹線が静岡に近づくと新緑の丹沢の向こうに、残雪が穏やかな富士が光っていた。

(了)

—おわりにかえて—

等高線

後藤隆徳

ヤラ・ピークよ

永遠に

98年5月1日午前7時、私達高岡、加藤、後藤、(今泉)はあこがれのネパール・ヒマラヤ、ランタン山群ヤラ・ピーク(5520m)の頂きに立った。日本を4月23日に出発して8日目のことだった。

細長く両側が切れ落ちた狭い頂上で堅い握手を交わす。高岡、加藤、今泉は喜びで顔をクシャクシャにする。皆初めての海外登山で、しかも未知の高度の山を見事に登ったのだ。先程まで周囲の山々を覆っていた霧は晴れ、天を抜く盟主ランタン・リルン(7226m)をはじめとする、ヒマラヤの雄大な峰々が見渡せた。

ささやかではあるが、登山を始めて30余年、私も永い間夢見たヒマラヤに足跡を記すことが出来た。予想どおりヒマラヤの高峰は素晴らしかった。ヒマラヤ巒が幾重にも重なるガンチェンボ(6387m)、大きな氷河が横たわるランシサ・リ(6427m)、サクラ草とアヤメが咲き乱れるキャンジュン・ゴンバ。

それらは、1日中眺めていても決して飽きることはなく、その姿は正に「神々が宿る山」に相応しく、人々が畏敬の念をもってやまなかった。



懸念された高度順応は全員極めて良好だった。特に私は登頂日に最高の体調を発揮出来た。高度の影響は全く無く、日本の3千mの山を登っている感覚で、このまま6千m位は楽に登れると思った。基本的に日本の山をバリバリ登っている現役で高度順応が順調なら問題はない。

主従関係がある登山は初めてだった。他人に荷物を持ってもらい登山をしたのも初めてだった。最初、私より年配のポーターが裸足で60Kg位背負い歩いた時は戸惑いを感じた。いくら仕事とはいえ余りの立場の違いを思った。

テント場に着けばテントは設営済でお茶がサッと出てくる。3度の食事の支度は一切しない。日本では考えられない、いたせり尽くせりの大名登山である。しかし、彼

らは夏しかない貴重な現金収入の仕事と割り切っている。どんなに重かろうが、寒かろうが、明るく健気に頑張る。村の生活も過酷で不自由な環境だが、強く逞しく生きるその姿は感動的すらあり、文明にいささか毒された私達の生活に無言の警鐘を与えるものであった。

会創立5周年記念海外山行が計画された。私は、91年夏ヨーロッパ・アルプスのモン・ブラン(4807m)に登っているのに、今回はトレッキングでなく登山でヒマラヤの6千m級の山に登りたいと思った。そうすれば次回、機会があれば更に上の7千m級の山に登れる可能性もあるからだ。

しかし、6千m級の山は1ヶ月以上の休暇が必要になる。この不景気の世の中、1ヶ月以上の休暇取得は即、退職を意味する。結局、ヒマラヤ登山は山の高度もさることながら、車道がほとんどない分、往復の時間がべらぼうに掛かり、日数を費やすことになる。

そんな折り、短期間で金も掛けずにヒマラヤ登山が出来る今回の企画に出会った。何のノウハウもツテもない私達にはうってつけだった。短期間でヒマラヤ登山が可能なのはランタン山群がヒマラヤの中で最もカトマンドゥに近いからだ。

会から高岡、加藤が参加することになった。この2人の参加がなかったら、この山行の実現は難しかったかもしれない。いくら全国から募集するにしても、今まで苦労を共にした仲間と登らなかったら何の意味もない登山になってしまう。会のなかで共有の体験が語られ、それが次の時代に引き継がれるからだ。

偶然だったが伊豆ハイク・三島労山の今泉さんがこの山行に参加していたことは、私にとって非常に心強かった。山の経験は少ないが人生経験に長け沈着冷静。几帳面で語学は堪能。テントが一緒にいろいろと助けられることが多かった。私はまず、今泉さんにお礼を言わなければならない。ありがとうございました、今泉さん。

次は高岡さんである。実際初めての海外登山で5520mを登るのは冒険だったかもしれない。しかし、還暦を越えてもなお旺盛な登高欲と真摯な態度に、むしろ私達が励まされた。高岡さん、ご苦労さまでした。

そして加藤さんである。ここでは多くを語るのはやめよう。私はこの方がいなかったらどうなっていたか分からない。加藤さん、お世話になりました。私はしばらく加藤さんに頭があがりません。

また、いつも山行時は家の事を任せっきりの我が家族の皆さん、本当に申し訳ありません。安心して登山できるのも皆さんのお蔭です。ありがとうございました。ここに感謝の気持ちを申し上げます。

会員の皆様には心温まる多くのカンパをいただきありがとうございました。有り難く使わせてもらいました。今後少しでも皆さんのお役に立てばと考え、主に写真・スライドに使わせていただきました。

最後に拙い文を1年の長きに渡り連載させていただき、読んで下さった会員の皆さん、感謝に堪えません。ありがとうございました。今度機会ある時は是非皆さんと一緒にしたいと思います。それでは、ナマステ・ナマステ